

逸話を通して見る音の世界—長安西市東市の琵琶の腕くらべ—

器楽演奏の優劣を競うことは、いつの時代もあったのだろう。唐代の都長安においても、以下のような逸話が、晩唐の段安節の『楽府雜錄』『琵琶』の条にある。

貞元年間(785～804)に、康崑崙という琵琶の第一人者がいた。かつて長安が大旱魃にみまわれて、皇帝は詔を出し、東と西の両市を移して雨乞いをさせた。天門街では、市の人々がさまざまな勝負事を行ったが、音楽の勝負となると、東側では琵琶の腕前が最も優れた康崑崙がいるので、絶対に西側にはこれに敵う者はないと思われていた。そこで康崑崙を彩色された楼台に上げ、新たにアレンジした羽調の「録要」を一曲弾いてもらった。

まず、琵琶の名手康崑崙は、外国人である。康国はサマルカンド(ウズベキスタン共和国の東部)のこと、崑崙はマレーシアやインドネシア方面の総称で、それを合わせたものだからである。雨乞いが行われた天門街とは、承天門街のことであろう。徐松『唐兩京城坊考』には、宮城の南面に開かれた5つの門のうちの真ん中の門が承天門として、「正月元旦と冬至の日の朝会慶典、……あらゆる国々からの朝貢の使節や四夷の来朝者の謁見」(愛宕元訳『唐兩京城坊攷』平凡社 東洋文庫、20頁)が行われていたとある。宮城に南接して役所機関がある皇城があり、承天門街とは、皇城を東と西に分ける大きな通りをいう。徳宗は雨乞いを行う場として、承天門街で東市と西市の人々にさまざまな勝負事をさせた。それを神に見せることが、雨乞いに繋がっていたのであろうか。また皇城からさらに南にある町は、東側と西側とで性格を異にしていたようで、妹尾達彦氏は、9世紀になると「東側の官僚街と西側の庶民街に分かれた2つの異なる上層社会と下層社会が、お互いに芸を披露し合って競争するような状況が生まれてきている」(語り部トーク「古代奈良の『音楽』とシルクロード」『シルクロード学研究叢書』11、2006年、51頁)と述べている。

この東側が琵琶の名手として康崑崙に弾かせた曲は、新たにアレンジした羽調の「録要」であった。この曲は、同音で「六么」とも言われ、白居易の詩のなかにも、「六么・水調 家家に唱い、白雪・梅花 処処に吹く」(「楊柳枝詞八首」その一)とあるように、9世紀前半には流行した曲であった。琵琶の上手による、流行曲をさらにアレンジした演奏、それはすでに東側の勝ちを十分に予見させるものであった。しかし、話は予想外の展開を見せる。

西側は西側で別に楼台を建てたので、東市のものたちは大いにののしった。康崑崙が曲を弾くと、西市の楼台には一人の少女が琵琶を抱いて現れ、「わたくしもこの曲を弾きますが、その調子を楓香調に変えてごらんに入れましょう」とまづ言った。撥を下すや、その音は雷のようで、その素晴らしいは神業であった。康崑崙は驚き、教を請いたいとまで申し出た。そこで少女が衣服を着替えて現れると、実は僧侶であった。たぶん西市の金持ちが莊嚴寺の僧善本に金を出し、東市の勝ちを止めたのであろう。

ここでは、琵琶の音が雷のようだとある。それは素晴らしい音を表現するにはあまり相応しい表現とは言えないが、屋外に多くの聴衆が集まっていることを考えると、みなを黙らせて惹きつけるに十分な音量であったことをいうのであろう。さらに、変調した「楓香調」とは、それ以後流行したらしく、開成3年(838)、唐に渡った藤原貞敏が、揚州にて廉承武から伝授された琵琶譜のうち「琵琶諸調子品一卷」があり、そこには「風香調」「返風香調」などの調名が

みえる。996年ころにはほぼ成立していた『枕草子』の、第203段「弾くものは」には、「琵琶、調べは、風香調、黄鐘調、蘇合の急、鶯の囀りという調べ」とあり、我が国での流行のほどが窺える。さて、話をもどすと、康崑崙に勝る琵琶の弾き手は、少女の出で立ちであったが、実は莊嚴寺の僧侶であった。この寺は、長安の町の南西の隅の永陽坊にあった。隋代に「禪定寺」として建てられたが、その後唐代が始まる武徳元年(618)に「莊嚴寺」と改称された。その伽藍の規模は全国最大級であったようだ(愛宕元訳『唐兩京城坊攷』176頁)。そして、段善本という僧侶の琵琶が、康崑崙に勝ったという結末は、外来楽器として扱われてきた琵琶が、すでに中国人の手中に入り、技術的にも外国人のそれを上回ったということを象徴的に示すとも受け取れるのである。逸話はさらに続く。

翌日、徳宗は僧の段善本を宮中に招き入れ、その藝を披露させ、ことに褒めて奨励し、その藝を康崑崙に教えさせようとした。段善本は、皇帝に申し上げた「まず康崑崙に一曲弾かせてもらいたい」と。崑崙が弾くと、師として康崑崙に言うには、「本領がごちゃごちゃしていて、しかも邪声を帯びている」と。康崑崙が驚いて言うには、「段師匠は神人です。わたしが若くして初めて藝を学んだ際に、偶たま隣の巫女から一品絃調を授けられ、その後何人も師を換えました。段師匠の眼力はこのように玄妙です」と。段善本は皇帝に申し上げるに、「ひとまず康崑崙を楽器から十年ほど遠ざけ、その本領を忘れさせてからなら、教えることができます」と。皇帝は詔を出してこれをお許しになった。その後、康崑崙は段善本の藝を尽く自分のものとしたのであった。

もともとこの催しを企画したのは皇帝徳宗であり、その結果、勝者は宮中に召し出された。ここで注目されるのは、段が崑崙の琵琶を聴いて、そこから芸筋を見抜いたこと。さらには、自分の芸を学びたければ、琵琶から10年離れて、これまで身に備わった技術や癖を忘れなければならないという、琵琶修得の厳しさが描かれていることである。藤原貞敏が琵琶を学んだ9世紀前半、中国琵琶はすでに技術的にも高度な成熟期を迎えていたと言えよう。

さて、この『楽府雜錄』を書いた段安節は、音楽に精通していたと『新唐書』巻89や、『唐語林』巻2にもみえる。そしてこうした逸話を記した理由が、『楽府雜錄』の自序にみえる。

世の中が乱れて、礼楽をつかさどる太常寺は頽廃し、雅楽の楽器を掛ける道具もどこかに持ち去られ、警鼓もどれかもわからない状態になってしまいました。梨園の楽人たちも、半ばはすでに梨園から離れ、楽府の歌詞・楽章もみな失われたのです。わたくし(段安節)は、幼少のころから音楽が好きで、それゆえに何とか音階は心得ており、また音楽文化について見聞きすることも多く、これをよく記憶しております。いつぞや『教坊記』を見ましたが、詳しく丁寧に記したものではないようですから、わたくし自身の知るところを記して『楽府雜錄』一卷をこしらえました。

唐代中期に安史の乱の後つくられた『教坊記』と、唐末の黄巢の乱の後につくられた『楽府雜錄』、その制作意図は、乱によって崩壊してしまった音楽文化を記録しておこうという点で共通していた。ただ、段安節は「琵琶録」という本を作ったとされ(『玉海』巻110に引く『中興書目』)、『楽府雜錄』でも琵琶についての記述に多くの紙面を費やしている。江戸の音を三味線だとなると、琵琶は、唐代長安の音であったと言えるかもしれない。